



親く、祖母と孫という長寿命の人類ならではの関係性が子孫繁栄に寄与しているのではないかという仮説も興味深い報告でした。



宮城大学 食産業学部
教授 森本素子氏

森本氏の発表では、人間を構成する 60 兆個という細胞のひとつひとつが、変化に対応するということを前提とした構造を持っており、わずか 4 日で入れ替わる小腸の絨毛をはじめとして、私たちの身体は変化を受容しながら日々新しく生まれ変わっている姿が紹介されました。

こうした生物としての柔軟性を東日本大震災での自らの被災経験に重ねあわせ、変化を受け入れながら互いに補完する社会、そしてそれまで考えもしなかった新しい経路での自己を形成し、外からの圧力をテコにして生き残っていくとする生命の力強さが語られました。

いずれの発表も、それぞれの観点から「変化に対応する」ことの重要性が語られていたように思います。この基調シンポジウムのはじめに、座長の位田氏によって語られた、「元に戻すという『復興』という観点から、新しい自分、新しい社会の始まりという観点への変換」が重要であり、人と動物と自然のバランスを保ちつつ生きるという言葉が、今の時代を生きる私たちの未来を象徴しているように感じました。



ポスターセッション

7月19日・20日 / 1F エントランス・ホール



ICAC KOBE 2015 の会場となる神戸大学総合研究拠点、学際研究推進体制を人文・社会学系を含めた全学規模に拡げ、大学の研究成果を集積することを目的に設置された施設で。この会議では、メインホールの他にラウンジ、セミナー室を使用して、同時に3ヶ所でシンポジウムとセッションが開催されました。

また、1階のエントランスはコミュニケーションルームとして開放され、シンポジウムや各セッションの合間の時間などに多くの来場者が訪れる場所となりました。国内外から参加した 14 組のポスターセッションが開催され、来場者との

積極的な交流の場となりました。審査員となる事務局アドバイザーが発表者から説明を受けたりしながら審査を行い、翌日の閉会式でアワードが発表されることになっています。

シンポジウム 1

「同行避難～これからの人と動物の緊急災害時」

7月19日 14:30～17:30 / コンベンションホール



杉原未規夫氏

阪神・淡路大震災で大きな課題となった動物との同行避難ですが、その後の中越大震災、東日本大震災などの災害を例に、兵庫県、新潟県、静岡県等の行政の担当者と、都市の安全計画の専門家、そして、災害時に現場で救助・復興のアドバイスを行なった専門家によって集中的に議論が行なわれました。



寺井克哉氏

複数の災害事例を持ち寄り、多角的に議論を行なう機会はそれほど多くありません。これらの発表の中から垣間見えるのは、災害が発生した地域によって対応や必要とされている支援の内容が違うということです。



遠山 潤氏

兵庫県動物愛護センターの杉原氏からは、阪神・淡路大震災当時のスライドを紹介しつつ、どのような被害の中で動物の救護活動が行われたのかが報告されました。当時集まった義援金の残金は、緊急災害時動物救護本部へと引き継がれ、今後の国内での災害時の動物救護初期経費として活用されることになりました。活動を通して実際に経験した、初動時の経費不足に苦慮したことが今後に活かされた事例です。



大西 一嘉氏

静岡県健康福祉部の動物愛護班・寺井氏は、東日本大震災での経験を踏まえ、「動物愛護」「被災者の心のケア」「人への危害防止」の観点から同行避難の必要性を示されました。同時に多くの人が被害に遭う災害では、基本的には避難所での飼育管理は飼い主の責任となりますが、飼い主そのものが被害を受けている中で、如何にその責任を全うしても



山口千津子氏

らえる仕組みを地域の中で作っていくのが、今後の行政の大きな課題となっています。

また、新潟県動物愛護センターの遠山氏の報告では、柏崎市が発表した避難所開設運営マニュアルの中には、はじめからペットを連れて同行避難をすることが前提になったチェック項目があり、犬の大きさや飼育頭数などを記載する欄が設けられています。動物との同行避難という課題は、けっして動物を飼っている人だけの問題ではなく、地域全体の問題として人と動物の両方に手を差し延べるべき課題であるという指針が示された好例といえるのではないでしょうか。

そして、神戸大学大学院研究科で都市安全計画の専門家でもある大西氏からはこれらの話を受けて、日常生活の中でどこにどのようなリスクが潜んでいるかを把握し、日頃から万が一のためにイメージトレーニングをしておくことの重要性が伝えられました。被害に遭うのは必ずしも在宅時ではないことが多いので、さまざまな状況に応じたシミュレーションをしておくことが大切です。

最後に、日本動物福祉協会の山口氏から同行避難について誤解されやすい部分についての具体的な説明がなされました。同行避難の基本は、飼い主が平時から備えておくということです。国や自治体は、あくまでも法律やマニュアルなどを策定し、救護および避難所への受け入れ態勢を整備することにありますので、家族の一員であるペットの命や幸せを守り、社会に対する責任を全うするのは、やはり最終的には飼い主なのです。そのために、日頃から各自で非常時に備え、地域の安全を自治体で守り、国がそのシステムを整備するということが強く求められているのです。

オーラルセッション 1

「食の安全／人獣共通感染症」

7月19日 14:30～17:30 / ラウンジ

お詫び

演者の都合により中止されました。関係者およびご来場の皆様にご迷惑をおかけしましたこととお詫び申し上げます。

オーラルセッション 2

「One Plan Approach ～野生動物と共存していくための包括的な取り組み」

7月19日 14:30～17:30 / ラウンジ



座長 高見一利氏

日本野生動物医学会の運営協力により、希少動物の保全活動を通して人と動物、そして生息環境との関係が議論されました。今回のセッションでは、コウノトリ、ツシマヤマネコ、ゼニガタアザラシの保全活動の内容と目指すべき方向を具体的に示



江崎保男氏



佐藤哲也氏



藤井啓氏

して頂き、一面的な対策の集合ではなく、「One Plan Approach」という多面的かつ統合的な対策の重要性について報告が成されました。

かつて日本全国に分布していたコウノトリは、兵庫県但馬地方の限られた場所でのみ棲息が確認できるまでに数が減少しました。兵庫県は、1999年に兵庫県立コウノトリの郷公園を開設して保護および繁殖を試み、2005年に野生復帰を開始しました。同公園の総括研究部長・江崎氏の発表では、コウノトリの野生復帰にはその個体がそれまでに生きてきた環境そのものの復元、ひいては我々人間の生活そのものを見つめ直すことが必要であるという考え方が示されました。我々日本人がこれまで農耕民族として培ってきた水田の生態系を見つめ直し、官民の連携で「人と自然の共生」の実現に向けた試みが紹介されました。

那須どうぶつ王国園長の佐藤氏からは、長崎県対馬にわずか70～100頭しか残っておらず、絶滅の危機に瀕しているツシマヤマネコについての調査報告が行なわれました。この報告では、県外の施設などで繁殖を行って対馬に戻すという生息地域外での保全に関する取り組みが紹介されましたが、2013年までは思わしい成果を得ることができませんでした。しかし近年、民間団体と環境省が連携し、域外で繁殖した個体を野生馴化して野生復帰させる国内初の試みとして推進されているとのことでした。

ゼニガタアザラシは、環境省のレッドデータに於いて絶滅危惧Ⅱ類に分類されていますが、その一方で、漁業にとっては害獣であるという一面もあり、また観光資源としての活用が進むなど、アザラシを巡っての人と動物との関係が複雑に絡み合っています。こうした現状について議論できる場として組織されたプロジェクトとっかかり・代表の藤井氏から、人と動物、そして環境とのかかわりについて大きな課題を投げかける報告がなされました。